

宗教心理学研究会ニューズレター

第11号 2009.12.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

公開講演会報告「祈りの心理－祈りについて考えてみよう－」	報告	中里和弘	1
「祈り」という行為はどのようにして習得されていくのであろうか。		齋藤耕二	4
たゆたう心－「源氏物語の祈り」余話		田畑邦治	6
私にとって「祈り」とは		森 真弓	7
「祈り」の諸相		大村哲夫	8
事務局からのお知らせ			11

公開講演会報告「祈りの心理－祈りについて考えてみよう－」

報告 中里和弘(大阪大学)

我々が「祈り」について研究を行う場合、果たしてこの「祈り」といった行為、あるいは対象をどのように捉えたら良いのだろうか。今回の公開講演会「祈りの心理－祈りについて考えよう－」は、まさしくこの「祈り」を科学的な「宗教心理学」といった視点から研究対象として検討する際の重要な視座を提起するものでした。

齋藤耕二先生の講演「祈りの心理学的研究」では、心理学の分野から「祈り」に関する先行研究について緻密な紹介がなされました。齋藤先生は、導入部として『「祈り」とは何か』といった問いに対し、まず、「祈り」を心理学的に捉えた場合、それは別段特別なものではなく、一般的な「祈り」と同義であること、ただし「祈り」と考えられるものは多種多様であり、共通性を見つけようとすると非常に難しいことを指摘されました。ただし「祈り」といった行為には「人間が祈ろうという動機が存在する」といった共通点を持つこと、「祈

り」は、広義の祈りとしての「公的・集団的な祈り」、狭義の祈りとしての「私的・個人的な祈り」に分類することができます。

そして齋藤先生は、「祈り」に関してこれまでどのような心理学的研究が行われてきたのかについて年代ごとに詳細な文献検索を行い、心理学的研究の現状を明快に提示されました。「祈り」の科学的研究の始まりはGalton(1872)の論文「Statistical inquires into the efficacy of prayer」に見られること、ただし「祈り」に関する実証的研究が行われるようになったのは1970年代以降であること(1969年以前;189件, 1970年以降;1037件), 研究の数は2000年以降に急激に増加したこと(2000年~2007年;573件)を挙げ、この急増の背景には、科学的研究の発展、宗教の世俗化、高齢化社会に伴う高齢者研究における宗教的視点の重要性(高齢者のWell-beingに宗教が影響を及ぼす)等が考えられるのではないかとの指摘が

ありました。加えてこれらの研究は、大きく1)目的変数としての「祈り」研究(祈りの実践, 発達等), 2)説明変数としての「祈り」研究(祈りの効用, 「祈り」療法等)の2つに分けられるものの, その多くは2)の説明変数としての「祈り」研究であるといえます(約95%の先行研究)。

また, 米国の研究(Poloma&Pendleton,1991)では, 「お祈りをしている人」の割合は88%に上ること, 一人の個人の中で複数のお祈りの型(儀礼型・祈願型・対話型・黙想型)がなされていること, そして特に対話型(神様を向こう側に仮定して対話をする型)が多くの人に共有されている「祈り」の型であることが報告されています(祈りをしている人数を100とした場合の「対話型」のお祈りをしている者の割合;84%)。一方, 日本人の宗教行動(読売新聞,2005)に関しては, 三大宗教活動は以下のような割合, お墓参り(79.1%), 初詣(69.9%), お宮参りや七五三(49.6%)で行われており, 海外で扱われる「祈り」に当たる「祈願」を行う人の割合は38.1%であったとする調査結果もあります。

次に祈りの発達(祈りの関連要因)に関する研究では, 主に子どものお祈りをする行為に親や学校, 教会がどのくらい影響を及ぼしているのかについて検討されています。重回帰分析やパス解析を用いた先行研究(Francis&Evans,2001)では, 子どもの性, 子ども自身の教会への出席, 親の教会への出席が祈りの実践に関連し, 子供の年齢が上がるにつれて親の影響は低下, 親以外(例えば学校)の影響が強くなるといった報告もあります。

また齋藤先生は, 「祈り」を説明変数と扱った場合の知見に関しても, 非常に参考となる先行研究を紹介してくださいました。例えば, 祈りのタイプとQOLやWell-beingとの関連を検討したPoloma(1989,1991)の研究では, QOLやWell-beingには祈りのタイプ(どういった祈りの仕方をしているか)は影響せず, Pray Experience(お祈りをしている時にどのような体験をしているのか; (例)神をどのくらい身近に感じているか)が影響しており, 祈りを単に「している・していない」といった次元で考えるのではなく, また「どのような祈りのタイプをしているのか」と「祈りからどのような体験をし

ているのか」について分けて考えることの重要性を指摘されていました。

齋藤先生がその他で紹介して下さった研究の中には, とりなしの祈り(人のためにするお祈り)の効果(Byrd,1988)や「祈り」療法の効用に関する研究(Parker,1957)等の報告もありました。ただし, パス解析を用いたAi et al.(2005)の研究では, 祈りをする行為が精神的健康に直接影響するのではなく, 祈りをする行為は精神的支えや前向きな態度を媒介して精神的ストレス(emotional stress)を防ぐことが示唆されており, 「祈り」が人間の精神的健康に及ぶ効果やメカニズムを考える上では, 媒介変数を含めた包括的な視点を持つことが重要といえます。

齋藤先生は, 「祈り」に関する先行研究を踏まえ, 講演の結びとして, 以下の3点について指摘されました。1)「祈り」と信仰・宗教性との交絡【研究を行う上では, 「祈り」の行為とどのような信仰を持っているのか(例:神を信じているか)といった信仰・宗教性に関する適切な組み合わせ, あるいは分離を理解し検討することが重要であること】2)宗教心理学の視点からの「祈り」研究【「祈り」の頻度など祈りの形式的な側面だけでなく, 祈りの中身そのものに踏み込んだ宗教心理学研究が必要であること】3)「祈り」への比較宗教的アプローチ【宗教によって, 「祈り」の様式, あるいは「祈り」をする中で得られる体験にはどのような違いがあるのかについて比較・検討を行うことが重要であること】です。そして, これら3つの視点は, 今後, 我々が「祈り」といった身近な行為あるいは対象を科学的にどう実証していくべきかに関する重要な提言ではないでしょうか。

続いて, 田畑邦治先生より「源氏物語における祈りの心理と救い」と題した講演を頂きました。田畑先生の哲学・宗教学から見た「祈り」についての講演は, まさに齋藤先生が結びで述べられた2)宗教心理学の視点からの話題提供であったように思われます。

田畑先生は, まず日本において「祈り」研究が少ない背景として, 『日本において, 「祈り」や「宗教」は「語るもの」ではなく「するもの(行い)」であるため, 「あいまいさ」を重んじる日本人のメンタ

リティ(精神性)の中には、学問的研究として「祈り」や「宗教」を論じるといった概念があまり存在しないのではないかと指摘されていました。そして広い意味で見た場合、「祈り」は、誰もが(無意識的に)行っている側面を含んでいながら、他方で「どのように祈ったらよいのか」を意識させる点において、「祈り」とは「学ばなければならないこと」つまり「学ぶことの必要性」を含んだ「行為」であるともいえます。他方「祈り」は、日本の古典を代表する源氏物語にも反映されています。田畑先生は、紫式部と源氏物語の中の源氏・紫の上が語る「祈り」について(合計17か所)を取り上げ、日本文化における「祈りの心理」について考察されました。

「祈り」は「普通の行為」ではなく「無為の行為」でありながらも、この世の行動を止めて手を合わせる行為は人間の心性を飛躍させ、逆に世俗の意味を深めさせる機縁にもなりうる。他方「物語」は、人間の心から生み出されたものであり、人間のあるがままの姿を書いたものととらえられるものではないか。「宗教」じたいも、人間の根源に触れる物語とも言えるのであり、その意味では、「物語」と「仏教」が行っていること、あるいは「物語」と「宗教」はとても深い関わり合いがあると言えます。

田畑先生は、紫式部の生涯と宗教性についても触れ、結婚3年後に夫を亡くした際の紫式部の歌(長保3年)を紹介されました。

「…瓶にさしたる女房の祈りけるを見て
若竹の おひゆくすゑを 祈るかな
この世をうしと いとふものから」

平安時代では、祈祷や儀礼的・公的な祈りが重要とされ、権力追求、愛執と罪といった個人の意見や希望を超えた神話的・原始的状況が支配的であったともいえます。しかしながら、このような時代でありながらも、この紫式部の『子どもの行く末を祈る』の心理、そして「瓶にさしたる女房の祈りを見て」といった『他者の祈りを見て祈る姿』は、まさに人間の生き方をも大きく左右する時代を超えた「人間の心のありようから生まれた

共時性」を反映してはいないでしょうか。

源氏物語には法華経のお経や浄土教のお経などがたくさん引用されていることから、紫式部は深く宗教的世界に生きていた人物と考えられます。その紫式部は37歳の時(重厄の年齢)、「紫式部日記」消息文(寛弘七年春)において、以下、出家のような道を求める生き方を宣言します。

「…人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひはべらむ。…ただひたみちにそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。…」

そこには、だれが何と言おうとも、繰り返し繰り返し阿弥陀様に念仏を唱えるという強い意志が表現されていると同時に、自分の心の中にある『たゆたふ』、つまり「気持がぐらつくことがあるのではないでだろうか」といった紫式部の「煩惱の姿」が反映されているように思われるのです。

さらに中心テーマである、源氏の「祈祷」と紫上の「祈り」については、田畑先生は、紫上に対する源氏の「あなたのこれまでの人生は幸せだったでしょう」といった言葉掛けに対して、紫上は「のたまふやうに、ものはかなき見には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にとへぬもの嘆かしさのみうち添うや、さはみづからの祈りなりけり」という言葉に注目されました。「苦しい嘆きの日々が、実は私の祈りだったのです」と紫の上は胸中を訴えます。そこには、平安時代に生きた女性の、受動的な宿命を背負いながら生きる人間の悩み(人間が苦しんで生きているその生き様)こそが「祈り」であること、そしてこの「祈り」のありようが、人間の根底をなしていることが強調されました。

田畑先生は、講演のまとめとして、源氏物語に歌われた「祈りの心理」を『「たゆたい」の心理と救いへの願望』といった表現でまとめられています。人はなぜ祈るのか、田畑先生はその問いに対して、源氏物語に反映されている『「たゆたい」の気持ち』を挙げています。人間のあいまいさであったり、ぐらつく心、物事に徹底できていな

い「煩惱の姿」、これこそが人間の姿である。ただし、この煩惱の姿(人間の姿)こそ決して絶望的な姿ではなく、誰の心にも存在する宗教心の基本的態度をなすと同時に、「祈り」によって、人間がこの世に「ある(存在する)」ことを可能ならしめる「救いへの願望」を生み出すのではないのでしょうか。

最後に、齋藤先生と田畑先生のご講演の後、全体討論、及び参加者一人一人から感想等が述べられました。全体討論では、まず「祈り」の効果と「思念」や「念力」との関連について議論が交わされました。往々にして「念(じる)」は「主観的」、物質(世界)は「客観的」と区別して捉えられる場合もあるが、元来、人間の精神と物質は離れておらず、人間は根本的に融合した1つの存在である、よって「念」と「物質」は深く関係してことは明確であり、今後は超心理学現象との関連を含めた研究を行う必要があるのではないかといった指摘がなされました。また、祈りの「方法」と「修行」との関連性に関して、「キリスト教における修行の中で「祈り」はどのようにされているのか」といった問いが挙げられました。この問いに対する1つの意見として、「修道会によって、祈りを行う時間等は異なり、具体的な祈りの「方法」というものは明文化されない。ただし、声を合わせて皆でお祈りをし、神に心をまかせるといったことは共有されている。そして、修道者が神のみことばを伝えるために仕事に出る生活、これこそが修行ではないだろうか」といった意見が出されました。また、「人格的な祈り」と「超越的な祈り」との関連

に関して、時に人格的な祈りは、神といった存在を限定・擬人化するものとして議論されることもあるが、人間の心の中には、人格的なものだけでなく、超越的なものに対するあこがれが存在し、禅仏教では、神といった言葉は用いられず、超越的な祈りとして「座禅」といった行為が位置づけられるといった意見も出されました。また、参加者から「祈り」と「合掌」との関係に関する意見も頂きました。本来、手という言葉(例えば「手を繋ぐ」・「手を結ぶ」)は何かを獲得する意味として用いられている場合が多いのではないかと。ただし、現代において時に問題とされる「リスト・カット」は、今の自分を認められず、自らが手に入れられなかったものを批判し、自分で自分を攻撃しているのではないかと。手を切らずに、右手と左手をあわせる(自分で自分を認める行為)「祈り」の行為こそ、獲得・競争中心主義、そしてどこか心のよりどころを失っている現代に必要なことではないかといった意見でした。

齋藤耕二先生と田畑邦治先生のご講演は、参加者に対して、改めて「祈りとはいかなるものか」といったことについて深く考える機会を与え、大変有意義な時間であったものと思われまます。そしてご講演を頂いたお二人の先生方の講演の内容は、「祈り」を研究対象として捉えた場合に必要不可欠な要素、「心理学」と「宗教学」を分離するものでなく、むしろ融合した、まさに「宗教心理学」としての可能性を改めて提起された貴重な講演であったといえます。

「祈り」という行為はどのようにして習得されていくのであろうか。

齋藤耕二(東京学芸大学名誉教授)

資料が見当たらなくなってしまっているので、あまりあてにならない私の記憶に頼ることになるが、源氏物語の中に登場する女性が友達の祈る姿を見て自分もお祈りをしようとするという文章があると、田畑先生が源氏物語を素材とした「祈り」についての話の中で指摘しておられた。心をこめ

て「お祈り」をしている姿には見る人の心を動かす確かな力があることは広く認められている。詳しく読んだことのない私などは源氏物語に出てくる仏教儀礼は加持、祈禱ばかりと思いこんでいたが、あの時代に生きた人々も仏に頼る以外に解決の道がない多くの事柄に直面して、真剣な

祈りを仏の前にささげたのであろうと想像できる。

「祈り」を対象とした学術的研究の古典とされているハイラーの著書(Heiler,F,1932,Prayer:A study in the history and psychology of religion.この本は英訳であって、原著は1919年に出版されている。)の結論である最終章で、「祈りの形が実に多様であってそこに認められる唯一の共通性は「祈ろうとする動機」だけであること」が指摘されている。そしてさらにこの「祈り」への動機の普遍性は人間性そのものにねざすことの証であると述べている。この記述を受けてある研究者はこの動機を「祈りの本能」とさえ言っている。

ハイラーは「祈り」は信仰の本質をなすもので、祈りのない宗教は存在しないとしているが、ブラウン(Brown,L.B,1994,The human side of prayer:The psychology of praying.)は祈りのない宗教が存在することを報告している。一方、現代の社会状況に照らしてみると宗教とは無縁な生活を送っている多くの人々が数多く存在しているし、おそらくこれらの人々は「祈る」ことなくその生活を送っているのであろう。

また、現代化といわれる社会変化が必然的にしばしば「世俗化」と呼ばれているような宗教の衰退を導いて、やがては宗教の消失へと向かうとこれまで言われてきた。1960年代から70年代にかけて注目を浴びた「世俗化」論争の背景となった西欧の国々で見られた「教会離れ」現象は教会所属率や礼拝参加率の低下をその根拠としていた。しかしながらこれらの指標が人々の宗教性の表現として今の社会でも妥当なものなのかという疑問が生じてくる。「スピリチュアリティ」とか「精神世界」と言われているものやカルトなどの新興宗教、さらには宗教というカテゴリーに入れられるのを避けようと運動などを見ると宗教性を宗教

組織への所属やそこでの活動にかぎることが適切ではないように思われる。

もしこのようにして、宗教性について新しい概念規定が必要であるならばそれに対応して祈りについても新しい、現代の宗教をめぐる状況のもとで幅広く妥当する新たな概念規定が必要となってくる。

私の発表の結論として、祈りについての心理学的研究がほとんど祈りの効用の分析に集中していて祈りの本質的機能を明らかにすることには関心が向けられていないことを指摘した。これらの研究で用いられている祈りについての定義は伝統的なものであるので、祈りという行為の本質をなすものが宗教をめぐる新しい状況での宗教性や宗教的活動にも認められるのであれば新しい定義に対応した操作による祈りの研究が必要となる。

西脇と私は宗教的社会化についてのささやかな展望を試みたが(西脇 良・斎藤耕二「宗教性およびスピリチュアリティの発達からみた社会化」、菊池章夫・他編『社会化の心理学／ハンドブック』、川島書店、近刊。)、宗教的社会化についての研究では層が薄く、限られた側面を対象としてごくわずかの研究成果が発表されているにすぎないことが見出されている。宗教と祈りをめぐる現代の状況からするとこれまでとは異なった新しい視点からアプローチが求められているように思われる。

祈りとはなにかという問題とともに祈るという行為がどのようにして習得されていくのか、あるいは祈ろうとする動機がどのようにして形成されるのかという問題はこれからの宗教心理学的研究に残された課題であると言えるだろう。

たゆたう心―「源氏物語の祈り」余話

田畑邦治(白百合女子大学)

今年6月27日の研究会公開講演会では、素人だてらに「源氏物語の祈りの心理と救い―紫式部と源氏・紫の上の祈り」というテーマで話させて頂いた。案の上、まとまりのないものとなってしまったが、自分なりの収穫は、源氏物語の主人公の心理と、作者の心理に共通するものとしての、「たゆたう心」の発見であった。「たゆたふ」とは、あちこちに揺れ漂うことであり、ためらって定めないことであるが、この言葉は、源氏物語に頻出する「もの思ふ」にも通じる心理であると言える。いずれも私たちにはなじみのある気分ではないかと思う。私たちも、いつも心があれこれと思い悩み、一つのことに定まらずに揺れ動いている。青年期の心理でも「自己同一性の拡散」といったりするが、それこそは「たゆたっている」状態であろう。

ところで、紫式部(源氏物語)においては、この「たゆたい」や「もの思い」が、ただこの日常の中での迷いや消極的な態度として見られているわけではなく、たとえば、出家すべきだという理想と現実のあいだでのたゆたいであり、また出家したとして途中で意志を貫徹できないのではないか、という意味でのたゆたいである。つまり、この場合、たゆたいは、いわば人間の超越的(宗教的)な主題との関連でのこころの揺らぎなのである

なるほど、光源氏には、若き日より、おのれの内面をみつめ、また人生の悲哀を味わうことが多く、道心の芽生えも早くからあったし、出家への願望も繰り返し言われるが、いつもたゆたい、先送りになるのであった。

発表でも紹介したことであるが、興味深いのは、作者紫式部自身が、自分の人生の岐路にあって、この「たゆたい」について触れていることである。

寛弘七年(1010)春に記された紫式部日記の

消息文にはこのような記述がある。

ほんとうにもう今となっては、遠慮は致しません。他人がなんと言おうとも、ただ阿弥陀仏にむかってひたすらお経を唱えましょう。世の中のいとわしいことは、すべて露ほども未練がなくなりましたので、出家した場合には、聖(ひじり)の生活を懈怠する(怠ける)こともありません。しかし、一途に出家しても、ご来迎の雲に昇らぬうちは、気持ちगतたゆたう(ぐらつく)ようなことがありそうです。そのためになおためらっているのです。ともかく出家に適当な年になってしまいました。いまよりも老いぼれて、あるいは目が悪くなってお経が読めず、心もますますものうさになるでしょうから、心深い人の真似のようですが、いまはただ誦経の生活だけを思っております。その願いも、自分のように罪深い者には必ずしも叶いそうではありません。先の世のことが思われることが多いので、すべてにつけて悲しく思われます。

この文章全体が「たゆたい」と言ってもよいほど、式部の心は揺れているのであるが、驚くことは、にもかかわらず、どこか毅然として後世を思い、道に励もうとする姿勢が明瞭であることだ。

たゆたいの心であっても、なお超越的な次元への関心を保ち得て、それを生活の軸にせんとする意志はいったいどこからくるものであろうか。心理学的にはそれはどのように理解すべきなのか、私にはよく分からないが、紫式部が「ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならはべらむ」と言っている、その「経」(經典)というものの存在が大きな意味を持っていたように感じられる。というのも、たゆたう心を支え、あるいは導くのは、私たちに手渡されているそうした客観的な伝統や古典的な文書であることが少なくないからである。

私にとって「祈り」とは

森 真弓(臨床心理士)

「祈りの心理学」という言葉が目にとまったのは、齋藤先生の研究でした。その刊行を心待ちにしていたのが確か2007年の夏。2008年秋に拝読させて頂き、祈りについて学びたい時には先生の論文からスタートさせて頂こうと思いました。2009年6月に公開講演会があると研究会ML(メーリングリスト)でお知らせを頂いた時には、「何を措いてもそこに居るべき私」と心は定まっておりました。「祈り」は私にとって生活の一部であると同時に、探求し続けている課題でもあったからです。「そこに居るべき私」は懇親会まで居てしまい、終にはニューズレター原稿の依頼をされることになってしまったのですが、それは正直、私には少々重たくありました。——私は私の「信仰」から離れて「祈り」について語る(講演会の感想を述べるだけにしても)が出来るだろうか? —— 苦しい～!! だけれど、ML上でのネクスト・ステージにおける川島大輔先生のお言葉(「ゆるやかなかたちではあっても得ていかなければならない宗教心理学における『合意』は、個々人の『信仰』の部分省察していくところから……」)に支えられ、原稿×切期日ギリギリにパソコンに向かっている私です。

6月のその日、私の心に新鮮な印象として残ったのは、齋藤先生の言葉です。「度々司祭様に『祈りなさい』と言われるが実はよく分からない。少しでも祈れるようになりたいという思いがこの研究に向かった動機」というような内容のことを講演会の中でご発言されていたと思います。先生ご自身の「こころ」が感じられ、ご自分のこころを開示されるその謙遜さ(と言わせて頂きたいです)に感銘を受けました。

私も祈ろうとしてきた者の一人で、ある時期(とき)は、教えられた12の型どおりに祈り(賛美・待ち望むこと・告白・み言葉・目をさましてい・とりなしの祈り・請願の祈り・感謝の祈り・賛美の歌・瞑想・聞くこと・賛美)、ある時期は、毎日数頁の執り成しの祈りのリストに沿って祈り、またある時

期は、教父オリゲネスに従って、ただ神様の眼差しの中に自分を置くことに意識を集中したりしました。書齋整理の際などに祈り遍歴の欠片を見つけたりすると、つかめない天空に両手を伸ばし続けている過去(プロセス)が愛おしくなったり、つかめなくていい、でもずっと手を伸ばしていきたいという思いになったり……。

田畑先生からは、「科学の知」と「物語の知」について教えられました。「物語」には人間の心を形成し癒す力があるということ、それは心理臨床のみならず医療の場でも言われていることに触れられてから、『源氏物語』から「こころ」・「物語」そして「祈り」という語を抽出されてそのご講演は展開していきました。先生は紫の上の祈りに注目し、「紫の上の祈りは、いわゆる既成の宗教的な祈禱を超えて、根源的に自分の意のままにならない受動的な存在を挙げてのおまかせの祈りであり、(略)存在の底からの叫び・うめきとしての祈りである」と結ばれていたのに、私自身も注目いたしました。

聖書の中で、祈りの始まりとされているのは創世記4章26節ではなかったかと思います。「セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた。」別の訳では、「(略)主の御名を呼び始めたのは、この時代のことである」とあるので、対照すると、「祈り=主の御名を呼ぶ」となります。エノシュという名前には「死ぬべき弱さ」という意味があるそうで、祈りは人間の弱さの極みから生まれたとも解釈されます。あるいは日常であった神との個人的・直接的な交わりが不可能になったから「祈り」が始まったとも言われます。

祈り遍歴を続けている私にとって、今、祈りとは、(飛躍したあるいは拙い表現だとは思いますが)、紫の上の祈りとエノシュの名に後押しされて敢えて言葉にすると、「(自分では)何もしない(できない)」という「こころ」を「神様」に「見てもらうこ

と)もしくはそのための「時間」と言えるかもしれませんが。「時間」という語を祈りの定義に入れることは、私には重要なことです。

個人的な定義からなかなか進展できないのですが、自分という個を認めることが許されると、他をもっと見せて頂きたいという思いになるものです。お二人のご講演が終わってから、人数が

割合少なかったこともあって、参加者全員の意見・感想をお聞きすることができたのですが、コメント1つ1つがとても興味深かったです。特に恩田先生の話されていたサイコキネシスについてもっと知りたい思いでいっぱいになりました。ぜひまたの機会に…。

「祈り」の諸相

大村哲夫(東北大学・医療法人社団爽秋会)

日本人は神に現世の幸福を求め、仏にはただ救霊のことだけを希う。(Luis Frois,1585)

はじめに

公開講演会「祈りの心理」が開催された。「祈り」は「あらゆる宗教現象の中心」(大峰顕1973)とされるように、宗教心理学にとって最も重要な研究対象である。臨床心理学を日本に根付かせた河合隼雄先生も、さまざまな著作で祈りについて触れているが、河合先生が自ら創設した日本箱庭療法学会で現役最後の大会テーマとして基調講演したのも「祈り」であった。広く深く神秘主義にも通じる宗教行為である「祈り」ほど、難しくそして興味深いテーマはないと私は思っている。

本講演会は齋藤耕二先生の「祈りの心理学的研究」ではじまり、この分野の先行研究を整理し、今後の課題を提起された。ついで田畑邦治先生による「源氏物語における祈りの心理と救い」が講演され、源氏物語をテキストに日本人の祈りについて考察を示された。詳しくは講演内容を紹介する他の記事を参照して頂きたいが、一方は西洋的なロゴスにもとづく「祈り」とその研究の紹介であり、もう一方は源氏物語に見られる受動的で「身の憂さ」と表現される身体感覚的で情緒的な「祈り」の紹介である。対照的で刺激的な両講演であったと思う。

本稿では当講演会を通して筆者が刺激されて感じたことを踏まえ、筆者が以前論じた「仏に代わって祈りを聞くカミガミー禅宗寺院における自

力と他力、祈禱の構造一」(2006)の概要を紹介したい。

祈りの類型

祈りの類型はさまざまあるが、筆者は次のように考えている。なお本稿では人が祈る対象である神・仏、超人間的な存在をカミと表現している。

1. カミと人の交流
2. 人のカミに対する祈願とカミからの応答
3. 人のカミに対する祈願

1はカミと人が内面において対話するもの。2は人がカミに問題の選択を委ね、その結果を示してもらうもので、1と異なり一回ごとのやりとりとなる。3はカミに人の願いを訴え、その実現を期するものである。具体例を挙げると1は瞑想や黙想、念想などであり、カミを広義の真理とおけば坐禅なども含まれる。2は人が参籠などを行い、託宣や夢のお告げなどでカミの意志を伺うもので、古代ギリシャから日本に至るまで行われてきた。3は病氣平癒や合格祈願、商売繁盛、家内安全などの現世利益を願うもので「祈禱」とも呼ばれているものである。

自力と他力ー禅宗寺院における祈禱

筆者は「自力」修行と言われる禅宗(曹洞宗)寺院において、現世利益を求める「他力」の祈りである「祈禱」が行われていることに違和感を覚え、その構造に関心をもった。筆者の理解によると、禅とは絶対的な超越者(神格)を措定せず、

人間であった釈迦をモデルとしてその言動を模倣、すなわち修行することで釈迦の獲得した真理を追体験しようとする「宗教」である。特に道元の将来した曹洞宗は、只管打坐を標榜し坐禅を中

心とする厳しい修行で知られており、およそ現世利益とほど遠いと考えられている。ところが以下の表に示すように、実際には祈祷寺院として知られる曹洞宗寺院は少なくないのである。

表1 祈祷寺院と祈られるカミガミ

寺院名	所在地	祈祷対象のカミ	祈祷内容	その他
菩提寺(恐山)	青森県下北	「延命地藏菩薩」	諸願成就	死者供養の霊場、湯治
善宝寺	山形県鶴岡	「竜神・竜女」	大漁祈願、海上安全等	東の金比羅さん、民間祈禱師の守り神
迦葉山竜筆院、弥勒寺	群馬県沼田	「中峰大薩(中峰尊)」開山の弟子。迦葉尊者の化身。天狗	諸願成就	
高岩寺(とげ抜き地藏)	東京都東鴨	1.「延命地藏尊」 2.「洗い観音」	1. とげ抜き抜苦 2. 病氣平癒	おばあちゃんの原因
最乗寺	神奈川県足柄	「道了大薩摩(道了大権現)」開山の弟子。十一面観音の化身。烏天狗。	諸願成就	
総持寺	神奈川県鶴見	「三宝大荒神」	諸願成就、火防	
可睡斎	静岡県袋井	「秋葉三尺坊大権現」観音大士の化身。迦楼羅身(烏天)	火伏、諸願成就	
妙厳寺(豊川稲荷)	愛知県豊川	「豊川ダキニ真天」	商売繁盛、開運招福	日本三大稲荷
(『禅学大辞典』、各寺HPなどより筆者作表)				

善宝寺、最乗寺、妙厳寺は「洞上三大祈祷道場」と呼ばれている。いずれも住職が永平寺や総持寺という大本山に出世し、曹洞宗の管長を務めることもある宗門の有力寺院である。

曹洞宗寺院の教義上の本尊は釈迦であり、その後継者の祖師達が礼拝対象とされる。祈祷寺院にもこれに則った本尊が祀られているが、祈祷の対象とされるのは釈迦以外の神や菩薩、竜神、天狗などのカミガミである。「自力」修行を旨とする禅宗寺院において、祈祷という「他力」志向の「祈り」が行われる違和感に加えて、本尊以外のカミガミが祈りの対象とされていることについても疑問が深まるのである。そこでこれらの問題について考えてみたい。

曹洞宗における祈祷

一般に曹洞宗寺院において道元(1200-1253)時代は、祈祷は行われず、その三代後紹瑾(1268-1253)になって「寺門交流発展のための、一つ

の方便施設」(峰岸秀哉1973)として導入されたと理解されている。そこで道元の祈祷について調べてみると以下のようなことが分かった。

1. 道元は祈祷を行わなかったわけではない。定期的な祈祷は宋朝禅の伝統に基づく「竈公諷経」や「三八念誦」、「園頭念誦」、「祈晴」、「聖節看経」など修行の無事や国家のための「公的な祈り」が主である。
2. 道元の祈りは「仏法僧の三宝」、「十仏」という仏祖に祈り、竈公真宰、龍天、土地神などのカミガミに回向している。
3. 道元は不定期に有縁の死者のための上堂、寄付をした人(施主)のための看経、回向も行っている。

ついで紹瑾の場合は、

1. 紹瑾の『瑩山清規』には道元より遙かに多い42の祈祷が年中行持として組み込まれている。
2. 紹瑾の祈祷対象は、道元の仏祖から中国のカミガミ、日本のカミガミと広がっている。

3. 紹瑾の回向対象は、外護者である俗人へ廻らすものが増えている。

これらのことから、道元から紹瑾に至ると俗人へ功德を廻らす祈祷が増え、祈りの性質が公的なものから私的な現世利益へ移行するにつれて、祈られる対象も仏菩薩から日本の神祇に移行していることがわかる。そこで筆者は、祈りの

構造を次のように考えてみた。

祈りの構造

公的な祈りの場合仏祖へ直接祈る二者関係であるが、現世利益などの場合は以下に示す四者関係の構造となる。

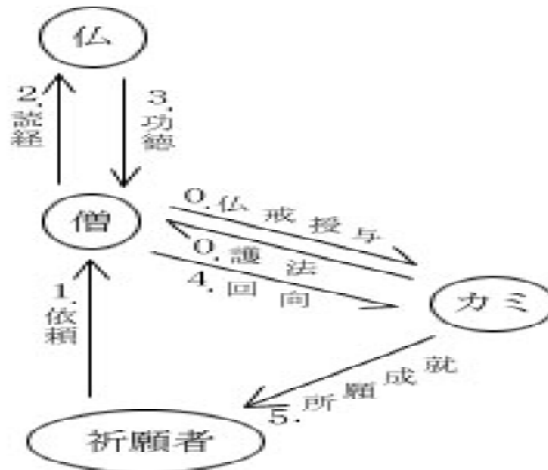


図1 祈禱の四者関係 筆者作図

0. 土地のカミが僧の前に現れ、験力比べなどをする。カミは僧に破れると、仏弟子となり僧に仏戒などを授けてもらい、代わりに仏法守護・信者の所願成就を約束する。
1. 祈願者は、修行をして験力をもった僧に所念の祈禱を依頼する。
2. 僧は読経をする。
3. 読経は仏陀の言葉であるので霊力があり、読経者である僧は功德を受ける。
4. 僧は受けた功德をカミに廻らし、祈願者の願いをカミに伝える。
5. カミは功德を受け、祈願者の願いを聞く。

考察

1. 自力、出家主義を旨とする禅宗寺院が、神人教化によって土地のカミを仏教に取り込み、仏教と土地のカミとの対立を解消すると同時に、より強力な現世利益の祈りを可能とした。その

- 結果俗人の外護を獲得して曹洞宗の教線は拡大し、道元の出家中心の禅が、15000ヶ寺を超える日本最大級の教団となった。
2. 坐禅という真理との直接交流を志向する「祈り」と、祈禱という民衆の切実な願いを聞く「祈り」の両者が相俟って、禅宗寺院は「自利、利他」両面の救済機能をもつことが可能になった。
3. 禅宗寺院における仏、カミ、僧、祈願者による四者関係の構造は、禅仏教の煩悩にとらわれず真理を追求する自力修行という本質を残しつつ、民衆の現世利益の期待を仏ではなくカミに委ねることで一定の整合性を持たせようとしたとも考えられる。

終りに

「祈り」は宗教の本質であるが、意味するものはあまりにも広い。本講演会に触発されて拙論を

紹介したが、安易な類型化は本質を見失う危険もあるだろう。本講演会を契機に、拙論への批判も含めてさまざまな「祈り」研究が宗教心理学研究会の中外で展開されていくことを期待したい。

文献

大村哲夫 2006 「仏に代わって祈りを聞くカミガミー禅宗寺院における自力と他力、祈祷の構造－」『東北宗教学』Vol. 2

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第11号が発行されました。発行が予定より大幅に遅れてしまい誠に申し訳ございませんでした。今回の内容は、公開講演会報告、講演者、参加者からの感想からなっております。

これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。 (K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2010年1月

第8回研究発表会(日本心理学会第74回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討
日本心理学会第74回大会ワークショップ申し込み

2010年2月

宗教心理学研究会ニューズレター第12号の構成・編集作業

2010年3月

宗教心理学研究会ニューズレター第12号発行(予定)

発行: 宗教心理学研究会
編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/